
ヒメミコ伝異聞譚 神在月の巫女

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒメミコ伝異聞譚 神在月の巫女

【Nコード】

N2967I

【作者名】

神村律子

【あらすじ】

邪馬台国の昔から続く姫巫女流古神道。邪法に手を染めた小野源齋が宗家を滅ぼそうと動き出した。宗家の生き残りである小野楓は源齋に勝てるのか？

登場人物紹介（前書き）

「ヒメミコ伝 古代の魔神」を先にお読みいただくとより世界観がご理解いただけると思います。

登場人物紹介

主な登場人物

小野 楓

姫巫女流古神道の使い手。小野家最強の巫女。17歳。

小野源斎

姫巫女流の邪流である黄泉路古神道の使い手。実年齢は15歳。

小野亮斎

徹斎の長男。後に宗家後継者となる。10歳。

小野享斎

徹斎の次男。後に京都小野家の開祖となる。9歳。

蜻蛉かげろう

源斎の手下。主に肉弾戦を得意とする。壮年。

蜥蜴とかげ

源斎の手下。ある一門を追放された陰陽師。老年。

小野晋斎

小野第一分家当主。楓に協力する。40歳。

小野耀斎

晋斎の長男。楓に淡い恋心を抱いている。16歳。

序の章 黄泉路に落ちた男

はるか邪馬台国の時代から連綿と続く姫巫女流古神道。ひめみこりゅうこしんどうその継承者の家系である小野家は日本全国に「小野神社」を有し、陰で国を支えて来た。

小野源斎。小野家のある分家の後継者である。

齢十五にして天才の片鱗を見せ、すでにその力は父である斎明さいめいを凌駕していた。

それ故に源斎は道を踏み外す。決して手を出してはならない禁呪に近づいてしまった。

時は一気に動乱の時代を迎えようとしている頃。いわゆる所謂幕末である。斎明は、西洋人の手によって日本が滅ぼされると本気で考えている攘夷派の人間だった。

「徳川の世が終わるのは良い。しかし、南蛮人はそれだけでは収まるまい。必ずや帝にまで害をなすはず」

源斎は斎明の言にただ頷くだけである。

「よいか、源斎。我ら小野家一門は千年近くの長きに渡り、朝廷を裏で支えて来た一族。今回はまさしく朝廷始まって以来の一大事。必ずや南蛮人を討ち、日本を守るのだ」

斎明の考えが時代の潮流に取り残されていることを源斎ははつきりと悟っていた。

（父上は自分の無知を知らぬ。世にこれほどの愚かしいことがあるろうか……）

源斎はその時父殺しを思い立っていた。

（このままあの父を生かしておいても、俺はもちろん、日本のためにも小野の一族のためにもならぬ）

すでにこの頃の源斎は自惚れていた。実力のある自分が実力のない父親を殺すのは正当なことだと考えたのである。

「何だ、源斎？ 妙に殺気立っておるが……？ 何かあったのか？」

自分の部屋に声もかけず、音も立てずに忍んで来た源斎を見て、斎明は驚いていた。

「何もありませぬ。しかし……」

源斎は言葉を切った。斎明はムツとして、

「何だ？ 申してみよ」

「これから起こりまする」

「何？ わけのわからんことを申すな。これから何が起こるのじゃ？」

斎明はその時書をしたためていたのであるが、筆を投げ出して立ち上がった。源斎はそんな父親を軽蔑した目で見たまま、スーッと右手の人差し指を斎明に向けた。

「父上が死ぬのでございます」

「何!？」

斎明は何も防御の手立てができなかった。

「うわアッ!」

斎明の身体に黄泉醜女という死の国の魔物が何体も取り憑いた。

「げ、源斎、貴様、まさか黄泉路古神道よみじしんどうを……」

溶けて行く顔を引きつらせながら、斎明は源斎を睨んだ。源斎は黙ってニヤリとした。

「お、愚か者めエッ!」

斎明はそう叫ぶと消えてしまった。源斎はカッと目を見開き、

「父上如きに愚か者呼ばわりされる源斎ではない!」

と怒鳴った。

源斎は翌朝、京都にある小野宗家の邸を訪ねた。源斎は栄斎の力に畏怖の念を感じていたが、今回のことは誇らしく思っていたので

強気だった。

「何用だ？」

源齋は正門の前で栄齋の息子三人に中に入るのを阻まれた。

「……」

源齋は何も言わずに三人を見た。長男徹齋、次男慶齋、三男齋英。いずれも源齋以上の力を持つ術者であった。しかし、源齋はもはや三人を超えたと思っていた。いや、栄齋すら超えたと思っていた。

「その目……。人を殺して来た者の目だな」

徹齋がまるで源齋の心を見透かすかのように言った。源齋はニヤリとして徹齋を見ると、

「さすがですね。しかしその先は読めませんでしょう？」

と言い放った。徹齋はカッと目を見開き、

「読めておる！ 貴様、父上を殺しに来たな！」

と言うと身構えた。慶齋と齋英もバツと身構えた。しかし源齋は全く怯んでいなかった。

「お三方には用はありません。お退き下され」

「ふざけおって！」

三人それぞれが光の剣を出した。

「貴様、分家の、しかも最下級の者が、宗家三兄弟を相手に勝てると思っているのかアツ！？」

慶齋が怒鳴った。源齋は慶齋に目を転じ、

「思っておりますよ。我が術はお三方を一瞬にして葬り去れますので」

「貴様アツ！」

三人は一斉に源齋に斬りかかった。源齋はスーッと漆黒の剣を右手に出し、身構えた。

「何？」

徹齋はこれに気づいて踏み止まったが、慶齋と齋英は構わず源齋に斬りつけた。

「やめろ、お前達！ そいつの持っている剣は……」

と徹斎は叫んだ。だがすでに慶斎と斎英は黒い剣に真っ二つにされていた。

「たわいもない。宗家の方とは、この程度でしたか。これでは千年の歴史が泣きまするな」

源斎は嘲笑して徹斎を見た。徹斎はキツとして源斎を睨み、

「愚か者め！ 宗家の力、甘く見るな！」

と言うと、右手に別の長剣を出した。源斎はニヤツとして、

「ほオ。それは神剣十拳の剣。宗家の正当継承者のみが用いることのできる剣」

「そこまで知っていながら、まだこの私に刃向かうつもりか？ つくづく愚か者よ」

徹斎は勝利を確信し、フツと笑った。

「しかしその剣にも斬れぬものがありまする」

源斎は全く冷静だった。徹斎は眉をひそめて、

「何だと!？」

源斎はバツと黒い剣を振り上げ、

「それこそがこの黄泉剣！ 暗黒の魔剣でございます！」

「やはり……」

徹斎はギリギリと歯ぎしりして、

「宗家の後継者として、貴様のように邪法に身を委ねた者を生かしておくわけにはいかぬ」

次の瞬間、十拳の剣と黄泉剣がぶつかり合い、火花が飛び散った。

「なるほど。確かに長兄徹斎様。実力では栄斎様以上と噂されるだけのことはある」

「くっ…」

徹斎は源斎の余裕の表情を見て焦っていた。

「おのれ！」

徹斎は源斎から一旦離れ、次の一撃を繰り出すため、動こうとした。しかし足が地面に根を張ってしまったかのように動かなかった。

「そ、そんな…」

徹斎の足は溶け始めていた。

「今すぐ楽にして差し上げますよ、徹斎様」

「おおおっ！」

源斎の黄泉剣が、徹斎を一刀両断した。徹斎は黄泉の黒火に焼かれ、消滅してしまった。

「はっ！」

源斎はその時、門の中から迫る凄まじい気を感じ、思わず後ずさった。

「そうか。貴様、やはり黄泉路に足を踏み入れたか」

白髪に白く長いひげの老人が姿を現した。源斎は身構えながら老人を見て、

「栄斎様か？」

と尋ねた。老人は大きくゆっくりと頷き、

「いかにも。わしが小野栄斎じゃ。貴様、源斎じゃな？ 斎明はどうした？」

と尋ね返した。源斎はニヤリとして、

「殺しました。我が手で！」

と右手を突き出し、握りしめた。栄斎はカッと目を見開き、

「自分の父親を殺しておきながらその態度、人としてあるまじきものじゃな。その思い上がり、叩き潰してくれるわっ！」

と叫んだ。そのあまりの気迫に、源斎は一瞬ビクッとした。

「ひとふたみよ いつむななやこのたり ふるえふるえ ゆらゆらと ふるえ」

栄斎は呪文を唱え、柏手を二回打った。

「神剣草薙の剣！」

と栄斎が唱えると、右手に十拳の剣よりひとまわり大きい剣が現れた。

「徹斎、慶斎、斎英の礼、させてもらうぞ」

源斎は十拳の剣の他に神剣があることを知らなかった。彼は焦っていた。

（何ということだ。まずい。黄泉剣以上の力を感じるぞ、あの剣…）

「覚悟せい、源斎！」

栄斎は剣を上段に構え、源斎に近づいた。

（くっ。足が動かん。何という壮絶な気なのだ…。こ、この俺が動けぬ…）

『源斎よ、うぬに力を貸そう』

どこからともなく、不気味な、男とも女ともわからない声が聞こえた。源斎はハッとして、

（今の声は何だ？）

と周囲を見回した。

「どこを見ている！？」

栄斎の剣が源斎を斬り裂いた。

「うおおおおっ！」

源斎は確かにその時死んだ。しかし、彼は黄泉の国の住人である建内宿禰たけしうちのすくねによって救われ、その魔の力によって栄斎の身体を乗っ取った。栄斎の魂は封じられ、その肉体は源斎のものとなってしまった。

「フッ」

源斎は真っ二つに斬り裂かれた自分の骸を見下ろして苦笑した。

「妙なものよ。自分で自分の死骸を見ることになるとはな」

源斎は小野宗家を離れ、そのまま行方をくらましてしまった。

小野楓は小野宗家の末子にして、実は宗家最強の術者である。まだ十七歳の楓は、源斎が宗家を襲撃した時、徹斎の子供二人と共に鞍馬山を散策していた。

楓は現代風に言えば長い髪をポニーテールのように結び、巫女の装束を着ている。女であるが故に宗家を継ぐ事はできないが、彼女はその事を悔しいと思った事はない。むしろ気楽な身分なので、喜

んでいるのだ。

「何、今のは？」

楓は邪悪な気を感じ取り、宗家のある方角を見た。

「まさか！？」

楓の動揺が二人の甥に伝わった。

「どうしたの、叔母上？」

徹斎の長男である亮斎が尋ねた。普段なら、

「叔母上はやめなさい。楓お姉様とお呼び」

と叱る楓だが、今日はそんな余裕はなかった。

「宗家で何かあった。戻るぞ、二人共」

「はい、叔母上」

次男享斎も答えた。

二の章 楓、宗家に戻る

楓は宗家の門の前で咄然としていた。真っ二つに斬り裂かれて死んでいる源斎がいたのだ。

「この人は…？」

彼女は一度だけ源斎の顔を見ている。でも話したことはない。恐らく源斎の方は、楓に気づいていなかったはずだ。

「何があったの……」

楓は亮斎と享斎が死体を見ないようにしっかりと抱きしめ、屋敷に向かった。

「楓様！」

父栄斎の付き人である末吉という老人が駆けて来た。顔面蒼白で、今にも倒れそうである。

「末吉さん。何があったのです？」

楓は亮斎と享斎を気遣いながら尋ねた。末吉は土下座をして、
「徹斎様、慶斎様、斎英様、討ち死ににございます」

「討ち死に？」

楓は二人の子供達を見てから、

「とにかく奥へ。話はそれから伺います」

「はは」

末吉は土下座をしたままで答えた。

楓は屋敷の中が荒らされていない事を知り、少しだけホッとした。そして亮斎と享斎の二人を二人の乳母に頼むと、末吉と共に奥の部屋に行った。

「兄上達が討ち死にとはどういうことですか、末吉さん？」

楓は末吉と向かい合って正座し、尋ねた。

「門のところで死んでいるあの男がいきなり現れまして、徹斎様達と戦い始めました」

「あの男が？」

源齋が何故？ 彼の事をまるで知らない楓には、合点がいかない。
「それで、男は真っ黒な剣くろなけんを出して、あっと言う間にお三人を斬ってしまいました」

「真っ黒な剣？」

楓はギョツとした。

（それはまさしく黄泉剣よみぎ。そんな剣を使えるという事は……）

楓はギョツと両手を握り締めた。

「そうですか。兄達は亡くなってしまったのですか……」

年の離れた楓を、三人の兄達はとても可愛がってくれた。楓の頬を涙が流れた。

「兄様方……」

黄泉剣で斬られれば、魂魄まで消失すると言われている。三人の兄達には、自分が死んでもあちらの世界で会う事すらできないのだ。

「あ」

その時、楓はあることに思い当たり、涙を拭った。

「末吉さん、父上はどうされたのです？」

末吉は首を横に振り、

「わかりません。大旦那様は賊を切り捨てると、まるでお人が変わったようなお顔になって、屋敷を立ち去られました」

「父上が？」

どういうことだ？ 楓の頭の中は疑問で溢れ返った。

源齋が兄達を殺した。

父栄齋が源齋を斬り捨てた。

父栄齋は何故かどこかへ行ってしまった。

そして、源齋の骸のそばで感じた言いようのない妖気。

「あんな気、今まで感じた事がない。人のモノとは思えない。何だったのかしら、あれは？」

楓はその妖気に底知れぬ恐ろしさを感じていた。

一方栄斎の身体を乗っ取った源斎は、比叡山の一角に来ていた。

「これより戦を始める。時が来たのだ」

源斎は彼の前で跪く二人の男に言った。一人は壮年、もう一人は老年である。

「我々闇の者達が、遂に戦う時が来た。虐げられて来た者達が、勝つ時が来たのだ」

源斎の言葉に二人は深々と頭を下げた。

「我々は道から外れし者として、日陰者として生きて来た。しかしそれももう終わる」

「はは」

源斎は二人を見た。

「蜻蛉かげろう」

「はい」

壮年の男が返事をした。忍び装束のような出で立ちだ。

「蜥蜴とかげ」

「はい」

老年の男が返事をした。こちらは白装束である。

「行くぞ」

「はは」

三人は歩き出した。どこへ行くつもりなのだろうか？

宗家襲撃の話は、すぐさま第一分家のある出雲に伝わった。

「何という事だ。源斎が宗家を襲うとは……」

第一分家の当主である小野晋斎は沈痛な面持ちで早馬で伝えられた文を読んでいた。

「現実のものとなったか、黄泉路古神道が。次に狙われるのはここか……」

晋斎は文をギュッと握りしめた。

「宗家の三人が弑されたとなれば、これから小野一門はどうなってしまうのだ？」

晋斎がそう呟くと、それを聞いていた嫡男の耀斎が、

「父上、まだ楓様がいらっしゃいます。あの方こそ、宗家一番の術者にございます」

「そうだったな。女子おなごが故に継承者たり得ないが、楓殿こそ…」

晋斎はピクンとした。

「もし源斎の真意が宗家を滅する事にあるのなら、楓殿のお命が危ういやも知れぬ」

「はい」

耀斎もその事を危惧しているようだ。

「耀斎、すぐに立出せよ。楓殿をお助けするのだ。宗家に事ある時、それを守るは第一分家のお役目だ」

「はい、父上」

耀斎は元気良く答えた。

「何やら嬉しそうだな、耀斎？」

晋斎は耀斎の心の内を見透かしている。耀斎はビクツとして、

「な、何でございますか、父上？」

と恍けた。晋斎はフツと笑い、

「まあ良い。とにかく急げ」

「はい」

耀斎は十六歳。一つ歳上の楓に淡い恋心を抱いているのは、父である晋斎はよく知っていたのである。

「しかし、源斎、一体どうやって黄泉路古神道を修得したのだ？」

晋斎は源斎の背後に何かあるのを感じ、その事が気になった。

楓はもう一度賊が現れた時の事を考え、屋敷の周囲に結界を張った。

「これでそう簡単には中に入れないはず」

「お見事にございます。さすが楓様」

末吉は涙ぐみながら言った。楓は微笑んで、

「末吉さん、あまり重荷に感じないでいいのよ。今はとにかく備え

る事。そして、父上の行方を探る事」

「はい」

楓は源斎の遺体を末吉に運んでもらい、宗家の庭にある斎場に安置した。

「いくら宗家に弓引いた者とは言え、死んでしまえば皆同じ。手厚く弔いましょう、我が流派で」

末吉は納得が行かない顔をしていたが、

「はい、楓様」

と応じた。

「それにしても、父上はいずこに……」

楓はそれだけが気がかりであった。

三の章 楓の力

結局その日、楓は徹夜で門の番をしたが、賊は現れなかった。朝日が眩しい。あれ程の惨事があったにも拘らず、空気が澄んでいた。

「賊も現れなかったけど、父上も……」

楓には栄斎の方が気になる。

「叔母上、父上は？」

亮斎が享斎を伴って楓のところに来た。

「危ないからお屋敷を出ては駄目よ、二人共」

楓はそこで溜息を吐いてから、

「亮斎、何度言えばわかるの？ 叔母上ではなくて、楓お姉様よ！」

亮斎は昨日は怒られなかったのと思ったが、口では楓に勝てないので、

「ごめんなさい、お姉様」

と形だけ詫びた。楓は真顔になって、

「貴方達の父上様は、遠い所に行ってしまったわ」

「もう会えないの？」

享斎が尋ねる。亮斎はすでに涙ぐんでいる。彼には父の死がわかったようだ。

「そうね。でもいつか会えるかも知れない」

楓は貫い泣きしそうな自分を叱咤し、何とか涙を堪えた。

徹斎の魂魄は消失してしまった。死んだのではなく、消えてしまったのだ。やり切れない思いが楓の心に溢れた。

「あら？」

楓は視界の端に誰かが入ったのを感じ、門の外に目を向けた。

「楓様、お久しぶりでございます」

そこに立っていたのは、出雲から夜通し歩いて来た耀斎だった。楓は吃驚して、

「耀齋様！　どうなさったのですか、こんなに朝早くに？」

「宗家の一大事と聞き及び、第一分家のお役目を果たすために馳せ参じました」

耀齋はその場に跪き、深々と頭こゝろを垂れた。

「まあ。もう出雲まで話が伝わっているのですか」

楓はそう言うてから、

「お顔をお上げ下さい、耀齋様。私は第一分家の跡目を継がれる方に跪かれるような身分ではございません」

と慌てて耀齋に近づいた。耀齋はハツとして顔を上げた。すぐそばに楓の美しい顔があった。彼は胸が高鳴り、顔を紅潮させた。

「滅相もございません、楓様に比べれば、私などまだまだ未熟者です」

「いえ、私は宗家の娘ですが、跡目ではありません。ですから……」
楓は混乱しそうになっていた。耀齋は年下で分家の嫡男であるが、自分の立場から見れば、上なのだ。しかし耀齋はそう思っていない。自由人だった楓は、今自分の立場が劇的に変化している事を思い知った。

「聞けば、栄齋様が行方知れずとか。ならば、今は楓様が宗家を取りまとめるのが一番でしょう」

耀齋は嬉しそうに言ってしまったから、楓の後ろで悲しそうな顔で自分を睨んでいる二人の子供に気づいた。

「もしやそちらは……？」

耀齋は冷や汗を垂らしていた。楓は亮齋と享齋を見て、

「兄徹齋の子達です」

「そ、それは失礼致しました」

耀齋は慌てて平伏した。

「申し訳ございません。徹齋様のお子様と存じ上げず、ご無礼致しました」

耀齋が楓を称えたのは、彼らを蔑ろにするためではない。憧れの女性と話したいが為の彼の思いから出た言葉なのだ。だから余計に

耀齋は動揺していた。

「お氣になさらないで下さい。この子達にはよく言って聞かせますので」

「はは」

耀齋は顔が上げられない。粗忽な自分を楓に見られたのが恥ずかしかった。

「さ、お屋敷に戻りなさい。私はもう少し耀齋様とお話がありますから」

「はい、お姉様」

亮齋は享齋を伴い、屋敷に戻って行った。

「耀齋様、立ち話では失礼でしょうから、こちらへ」

楓は庭の奥へと先導した。

「は、はい」

耀齋は改めて憧れの楓と二人きりなのに思い至り、赤面して後に続いた。

その頃源齋は、手下二人と共に御所ごしよを目指していた。

「鬱陶しい宗家は滅した。後は天下を獲るのみ」

源齋は朝廷をも滅してしまおうとしていたのだ。

「む？」

しかし彼は、宗家の方角から何かを感じた。

「どういう事だ？ 宗家の氣が盛り返しておる」

源齋は陰陽師の蜥蜴とかげを見た。蜥蜴は跪き、

「宗家にはまだ術者が残っております兆候がございます」

「術者とな。徹齋の子はまだ幼い。恐るるに足らぬ」

源齋は再び歩き出した。ところが蜥蜴は、

「いえ、別におります。徹齋が妹、楓にございます」

「楓？」

源齋は以前父齋明と共に宗家を訪れた時、若い女がいた記憶が甦った。まだその時はお互い幼く、挨拶も交わしてはいない。公式の

場には女は顔を出さないという宗家の古い仕来りもあつたためだ。

「女一人に恐れる事はあるまい」

源齋は蜥蜴の話を年寄りの取り越し苦勞にしか思っていない。

「いえ、楓は相当な術者にございます。この蜥蜴、このような身に落ちる以前、一度だけ見た事があるのです」

「見た？ 何を見た？」

源齋は苛立たしそうに歩を止めて蜥蜴を見下ろした。

「楓は空を飛びまする」

「空を？ 嘘を申すな」

源齋はムツとして言い返した。しかし蜥蜴は真剣な顔で、

「嘘ではございませぬ。鞍馬山で修行中に、偶々見たのですが」たまたま

「鞍馬山？」

源齋の顔が変わった。天狗が棲むという山に楓がいたのが氣にかかったのだ。

「楓が連れていた子が、木に登って降りられなくなっておったのを、楓が空を飛んで助けたのです」

「……」

源齋は姫巫女流古神道の全てを知っている訳ではない。しかし、姫巫女流の長い歴史の中で、空を飛んだ術者の話は聞いた事がなかった。

「もしそれが真まことの話であれば、朝廷の前に仕留めておくべきだな」

「はは」

源齋は再び歩き出した。但し、今度は宗家に向かって。

耀齋は庭の中央に建てられた東屋あずまやで楓と話していた。

「これは父上の考えとして聞いて頂きたいのですが」

耀齋は赤面しながら声を低くして言った。

「はい」

楓の顔が近づく。耀齋は更に赤面して、

「栄齋様は、源齋にお身体を奪われたのではないかと」

「え？」

楓は仰天した。栄斎は源斎を斬り捨ててから人が変わったような顔になったと末吉が言った。もし、耀斎の父晋斎の話が真実ならば、合点が行く。しかし、源斎にそのような力があるのだろうか？

「源斎はそれ程の術者ではないと思われますので、父の話も確かなものとは申せません」

耀斎もその点は気づいているようである。

「その事なのですが、一つ気になる事があります」

「はい」

耀斎は居ずまいを正した。楓は袖の中から小さな透明の玉を取り出した。

「これは、源斎という人の骸のそばで封じた妖気です。この妖気、今までに感じた事のないようなものなのです」

「妖気？」

耀斎は恐る恐るその玉を受け取った。楓に自分が怖がっている事を悟られないように。

「こ、これは……」

耀斎はその妖気に似た気に覚えがあった。出雲にある伊賦夜坂だ。昔から黄泉の国との境と言われている場所である。

「これは黄泉の国のものです」

耀斎の答えに楓は暗い顔になった。

「やはり黄泉路古神道ですか。源斎はそんな術をどこで修得したのでしょうか？」

楓の問いかけに耀斎は答えを持ち合わせていない自分が情けなかった。

「黄泉路古神道の開祖は建内宿禰たけしうちのすくねと言われています。その辺りを探ればあるいは……」

それが精一杯の答えだった。すると楓はニツコリして、

「そうですね。答えは奈良にありますね」

と言ってくれた。耀斎はそれだけで天にも昇る心地であった。

その時だった。

「何？」

楓が急に身構えた。耀斎も異様な気を感じ、周囲を見渡した。

「やはり結界を張っているか。しかし、この程度のもの、私には兎戯に同じ」

男の声がし、結界が消えた。

「破られた？」

楓はギクツとして門へと走った。

「楓様！」

耀斎がこれを追う。

宗家の門の前に^{とかけ}蜥蜴と^{かげろう}蜻蛉が立っていた。

「さて、手始めに暴れてくれ、蜻蛉」

蜥蜴が狡猾な笑みを浮かべて言った。蜻蛉はフツと笑い、

「承知！」

と叫ぶと、門の中に足を踏み入れた。

「何奴？」

楓が怒鳴った。蜻蛉は楓を見下ろし、

「我が名は蜻蛉。お前を滅す」

「何ですって？」

耀斎も来た。彼は異様な風体の男二人にギョツとした。

「私は蜥蜴。お命頂戴つかまつる」

蜥蜴は静かに言った。

四の章 宗家襲撃

ザザッと間合いを詰める蜻蛉^{かげろう}。楓はその動きに応じて下がる。

「楓様！」

耀斎が身構えて楓の前に出た。

「体術なら、私が相手をします！」

「舐めるなよ、小僧！」

蜻蛉は舌なめずりをして言い返した。

「耀斎様、ここは私が！ 耀斎様は……」

亮斎と享斎を守って下さいと言おうとした。しかし、それよりも早く耀斎は動いていた。

「テヤッ！」

耀斎の連続した蹴りが蜻蛉に浴びせられた。しかし、蜻蛉はいとも簡単にそれをかわしてしまった。

「くっ……」

耀斎は敵が想像以上に素早いのに焦った。

「小僧、この俺を見くびっていないか？ その程度の蹴りで、俺を倒すつもりか？」

次の瞬間、蜻蛉が耀斎へと飛んだ。

「ぬう！」

耀斎は蜻蛉の掌底^{しょうてい}をかわした。

「ぐうう……」

しかし、かわしたはずの掌底が耀斎の腹を襲った。まるで拳で殴られたかのように耀斎の腹がへこみ、彼は吹っ飛ばされて塀に叩きつけられた。

「耀斎様！」

楓は蜻蛉の攻撃が耀斎に届いていないのを見ていた。

「何、今の……？」

彼女の背を冷たい汗が伝わる。

「か…え…で…さ…ま…」

耀斎は気を失ったようだ。

「何とも頼りない用心棒だな、姫様？」

蜻蛉は耀斎を嘲り、楓を馬鹿にしたような眼で見た。楓はキツとして蜻蛉を睨んだ。

「女子であるが、随分と凄みのある顔をするな。俺はそういう女性が好きだ」

蜻蛉から淫の気が漂った。楓はそれを嫌悪の表情で感じた。そして同時にハツとした。

「気ね？」

楓の言葉に蜻蛉が動きを止めた。

「む？」

楓はからくりを見抜いていた。

「打撃と同時に気を繰り出す。だからかわしても逃げ切れない」

蜻蛉は、ほおという顔をし、

「さすが宗家の娘だ。気がわかるか。しかし、わかったところでそれまでよ」

「蜻蛉、油断するな。その娘は……」

後ろから蜥蜴が声をかけた。蜻蛉は、

「怖気づいたか、蜥蜴。この娘、大した気を持ち合わせておらぬ。大事ないわ」

とゆつくりと楓に近づいた。

「すぐに楽にしてやる。その後に愛でてやるよ」

蜻蛉が「愛でる」と言った瞬間、楓は激高した。

「不埒者め！ 容赦しないぞ！」

「ぬ？」

蜻蛉は思わず後ずさりした。楓の気が爆発的に膨らんだのだ。

「な、何？」

楓は風を巻いて走り、一瞬で蜻蛉の懷に飛び込んだ。

「ぬあああ！」

蜻蛉は仰天した。逃れようとしたが、遅かった。

「うぐおおお！」

みぞおち

楓の正拳が鳩尾に入っていた。しかも気を十分練り込んだ一撃である。いくら鍛えている人間でも、一溜まりもなかった。

「ぐほぐほ……」

蜻蛉は苦しそうに崩れ落ちて白目を剥いた。楓は次に蜥蜴を見た。
「怪我したくなくば、立ち去るが良い」

楓は蜥蜴が老体なので、叩きのめしたくはなかった。しかし蜥蜴はニタツとして、

「遠慮無用。但し、私は体術ではない。陰陽師よ」

「陰陽師？」

楓は眉をひそめた。

「先程の兇戯に等しい結界、破るに雑作もなかった。あの程度では、やり合うまでもない」

「くっ……」

楓は蜥蜴から感じる気を探り、彼の言葉が嘘でない事を知った。

「命は取らぬ。私は人を殺めるのを好まぬ。術者としての力、封じさせてもらう」

蜥蜴は懷から呪符を数枚取り出した。

「姫巫女流は日の本一と噂されるが、それはあくまで神道に限っての事。流派を問わずに比ぶれば、紛れもなく陰陽道の方が上よ」

蜥蜴は自信満々に言い放った。

「ならば試してみよ。我が姫巫女流がどれ程のものか！」

楓は挑発されていると知りながら、敢えて蜥蜴の誘いに乗った。

「中々に気の強い女子おなこよ。そこまで申すなら、しっかりとその身に刻んでもらおうか、我が術を！」

蜥蜴は冷静に、しかし威圧感を込めて言った。

「はっ！」

彼は呪符を投げた。それはまるで生き物のように飛び、楓に迫った。

「うっ？」

呪符が楓の両方の二の腕、両足首、鳩尾に貼り付いた。

「氣の流れをまず封じる。お前の氣は、さすがに私でも手を焼くよ
うなのでな」

「くっ……」

楓は全く氣が巡らなくなったのを感じていた。

（封じられた？）

「そして氣の流れが使えないお前は只の小娘。さア、蜻蛉。先程の
礼をするがいい」

「かたじけない、蜥蜴」

さっきまで白目を剥いていた蜻蛉が立ち上がっている。

「小娘、手加減したな。それはそれで俺にとっては屈辱よ。さっき
の礼、させてもらうぞ」

蜻蛉は舌なめずりして楓に近づいた。

「姫巫女流を甘く見るな、下郎め！」

楓は呪符を着けたまま、蜻蛉の方に向き直った。

「やる気か？ 氣を使えないお前の体術なぞ、稚児の戯れよ」

蜻蛉は完全に楓を馬鹿にしていた。

「姫巫女流はそれほど底の浅い流派ではない」

楓は蜻蛉に突進した。蜻蛉はせせら笑い、

「愚かな。それ程死にたいか？」

と構えた。

「グエッ……」

しかし、また白目を向いたのは蜻蛉であった。

「何と……！」

蜥蜴も啞然としていた。氣を練らなくても、楓の打撃は十分な威
力があつた。

「ううう……」

蜻蛉はまた崩れ落ちた。楓は再び蜥蜴を見た。

「今度はお前だ、蜥蜴」

「……」

蜥蜴は驚愕していた。

「その身体はどこにそれ程の力があるというのだ？」

「姫巫女流の鍛錬は常人の想像を絶する。私は兄達と同等の修行を積んで来たのだ」

楓は気合いを入れた。すると呪符がボウツと燃えてしまった。

「く……」

蜥蜴の額を汗が伝わった。

「油断を誘うために、呪符を貼らせたという事か？」

蜥蜴は苦々しい顔で尋ねた。楓は、

「それもまた兵法の一つ。まだ戦うか、ご老体？」

と一歩踏み出した。蜥蜴はニツとして、

「当然。私はまだ切り札を残しておる。もはや命を奪わぬなど言う綺麗事は言わぬ」

「そうか」

楓はチラツと耀斎を見た。彼はようやく意識を取り戻した。

「耀斎様、お退がり下さい」

「は、はい」

耀斎は自分が何もできない事を悟り、素直に引いた。

「この屋敷、すまんが全て壊してしまうぞ。怨むなよ」

蜥蜴の気が変化した。

「むっ？」

楓は蜥蜴の気の流れを読んだ。

「式神？
しきがみ」

蜥蜴は懐から取り出した呪符に呼気を当てた。

「我が僕^{しもべ}は強いぞ、娘。もはや辺り一面、灰燼と化す事になる」

「……」

蜥蜴は呪符を掲げて、

「我が式神よ、我が命に従い、敵を滅せよ。急急如律令！」
きゅうきゅうによりつりよう

と唱えた。呪符は宙に舞い、やがて巨大な黒い鬼のような姿となっ

た。

「ゴオオオオッ！」

その式神は雄叫びを上げ、楓に向かった。

「くっ！」

楓はその突撃をかわす。式神は屋敷の一部に激突し、破壊した。

「逃れてばかりいれば、屋敷が潰れるぞ」

蜥蜴は愉快そうに言った。

「何という……」

耀斎は只呆然として遠くから二人の戦いを見ていた。

「お前は姫巫女流が何故日の本一と噂されるのか、その理由を知らない」

楓の言葉に蜥蜴は苦笑した。

「この期に及んで世迷い言か。哀れな」

楓は柏手を四回撃った。普通柏手は二回である。

「何をするつもりか？」

蜥蜴は眉をひそめた。そして、

「ええい、潰してしまえ！」

と叫んだ。再び式神が楓に向かった。

「姫巫女流奥義、草薙剣！」

楓の右手に長さ四尺程の大きな光り輝く剣が現れた。それは栄斎が源斎を斬り捨てたものと同じであった。

「草薙剣だど？」

蜥蜴はキツとして、

「虚仮威しか？ やれっ！」

式神は構わず楓に襲いかかった。

「斬！」

楓は気合いと共に剣を上段から振り下ろした。すると剣先から光が放たれ、式神を真っ二つに斬り裂いてしまった。

「ば、馬鹿な……」

蜥蜴は目の前で起こった事が信じられなかった。

「陰陽道は確かに一目置く存在。しかし、お前の陰陽道は違う。道を外れた陰陽道は、只の邪法。安倍晴明あべのせいめいも黄泉の国で嘆く」

楓は鋭い眼で蜥蜴を睨んだ。彼女はその流派の道を外れ、本道を汚す者が絶対に許せないのだ。

「猪口才ちちよくな……」

蜥蜴は痛いところを突かれ、言葉を出し倦あぐんだ。彼は自分が一門を追放された日を思い出していた。何故追放されたのか考えた。

「ご老体、貴方はそのような術を使う方ではないはず。何故？」

楓は先程までの闘争心剥き出しの気を収め、優しい顔で尋ねた。

「宗家にいるお前にはわからぬ。流派が大きくなり、様々な思いが集うようになると、必ず私のような者が現れるのだ。姫巫女流もそれは同じはず」

「……」

確かに宗家でのんびりと育った楓は、一門の揉め事は全く知らない。

「お前の思いに報いよう。ここは引く」

蜥蜴はフツと笑って言った。彼は式神を使い、蜻蛉を背負わせた。

「だが、一門の火種は既に大きくなっているぞ。お前に消せるか？」

「……」

楓はこの二人が源斎と繋がっている事を改めて感じた。

「一つお尋ねしたい。源斎はいずこに？」

「それはある義理から教えられぬ」

蜥蜴は振り返らずに言った。そして、

「だが、何が起ころうとしているのかを思えば、わかるはず」

「はい」

楓は頭を下げ、蜥蜴を見送った。源斎の逆鱗に触れ、命を落とすかも知れない彼の無事を願いながら。

五の章　そして出雲へ

源齋は蜥蜴とかけと蜻蛉かげろうが敗れ、宗家から去ったのを知っていた。

「まあ良い。抜け忍と破門された陰陽師では所詮その程度よ」

彼は二人を捨て駒程度にしか考えていない。わざわざ殺す手間をかけるつもりもない。

「楓の力が量れただけで良い。さすれば、俺が向かう先は決まった」
彼は御所ごしよではなく、出雲を目指していた。

「鬼の力」

源齋はそう呟くと、京を離れた。

末吉は屋敷の玄関が崩れてしまった事より、楓の身体の事を心配した。

「私は大丈夫。それより、耀齋様を見てあげて。お医者様もお呼びしてね」

「はい」

末吉は使用人を数人集め、耀齋を屋敷の中に運んだ。耀齋は歩けると言ったのだが、楓がそれを聞かなかった。彼は楓に逆らう事はできず、素直に使用人に背負われて屋敷の中の客間に行った。

「これからどうなるのだろうか？」

楓は父も兄達もないことに不安を感じていた。

晋齋は出雲大社の近くにある小野神社で祭神である天照大神あまてらすおおみかみに祈っていた。

「黄泉路よみじこ古神道を使う者が現れるとは、姫巫女流の一大事。一門の力を集めてこれに立ち向かうしかない」

彼は源齋が出雲に向かっている事をまだ知らなかった。

「耀齋、無事か？」

晋齋は都に行った嫡男の身を案じた。

宗家には近隣の小野の分家から人が集まって来た。

一同は奥の間で車座に座り、話し合っていた。

「さすが第一分家は早かったな。我らが一番と思うたが」

大和（現在の奈良県）分家の当主である琳齋りんさいが言った。彼は本当は第一分家の継承者になるはずだったが、双子の兄である晋齋が継承者となり、跡目がない奈良に養子に出された。その事を恨んでいる訳ではないのだろうが、周囲の者には彼の言葉はそう聞こえてしまう。

「しかし、跡目の徹齋のみならず、慶齋も齋英も討たれてしまうとは、源齋め、どれ程の術を使うのか」

摂津（現在の大阪府）小野家の蓮齋れんさいが呟いた。集った分家の者の中で一番の年長者だ。数えて六十になる。

「おお、それよ。楓殿は源齋とは会うた事はないのか？」

近江（現在の滋賀県）分家の欽齋が尋ねた。彼は数えて五十二。二番目の年長者だ。

「はい。まだ幼き頃、見かけた事がありますが、顔を合わせた事はありません」

楓は欽齋を見て答えた。

「それと」

楓は妖気を封じた玉を一同に見せた。

「この気、一体何者の気か、おわかりになりますか？」

一同はその気を感じ、ギョツとして顔を見合わせた。

「黄泉の気じゃ。そのような気を、どこで？」

蓮齋がようやく口にした。楓は蓮齋を見て、

「源齋の骸のそばです。ご存知なのですか？」

「黄泉の気の中でも、最も質たちが悪い物じゃ」

蓮齋は辺りを憚はばるような低い声で応じた。他の分家の人間の顔も一様に暗い。

「質の悪い気ですか？ 何者の気なのですか？」

楓は一同を見渡すようにして尋ねた。

「建内宿禰たけしうちのすくねの物。間違いない」

琳斎が言った。楓はその名を聞いてビクツとした。耀斎の言葉を思い出したのだ。

「やはりそうなのですか」

「む？ やはりとは？」

楓の返答に蓮斎が反応した。

「耀斎様もその名を……。私もそう思いましたが、その証あかしがないので」

「成程」

蓮斎は楓の賢さに頷いた。そして琳斎を見た。

「どうじゃ、琳斎？」

「奈良には建内宿禰を封じている古き墓があり申す。しかし、何も異変はございません」

琳斎は耀斎の名が出たのが気に食わないらしい。途端に仏頂面になった。奈良のせいにするなど言いたいのだ。

「勿論、奈良だけが彼奴きやつを封じている訳ではないのは承知しておる。しかし、要かなめは奈良ぞ」

蓮斎は琳斎の反論を封じるかのように言い切った。琳斎も最年長者には異論を唱えられない。

「あの封印は一人の術者に破れるような代物にあらず。況まじしてや源斎ごときになど」

琳斎はそれでも別の方向から異を唱えてみた。

「私は、寧ろ出雲が危ういのではないかと考えております」

楓は言葉を選ぶように慎重に話した。他の一同は一斉に楓を見た。「何故そう思うのかな、楓殿？」

琳斎の言いようは意地悪く聞こえた。

「出雲には古き鬼が封じられていると父上から聞いております」
「古き鬼か」

蓮斎は腕組みをし、

「もしそうであれば、晋斎が危ういという事になるな」

「はい。一刻も早く、出雲に出立するべきかと存じます」

楓は身を乗り出して蓮斎に進言した。

「しかし、その留守を突いて宗家を襲うとは考えられぬか？」

琳斎には出雲などどうでもいいのだ。できれば滅んでくれてもいいとすら考えているのかも知れない。

「いや、もしそうなら手下が逃げた時に合わせて源斎が現れておるはず。それをせなんだは、奴にここを攻むる気がなしと見るべき」

欽斎が言った。楓は欽斎の考えと同じだった。

「私も欽斎様と同じ考えです。建内宿禰が絡んでいるのならば、必ずや出雲の鬼を狙うはず」

「そうじゃな。源斎だけならいざ知らず、建内宿禰が彼奴の背後におるとなれば、事は小野家だけではすまぬ話になる」

蓮斎も同意した。

「そもそも建内宿禰が黄泉路古神道を編み出したは、日の本を獲るため。宗家を滅するも彼奴の目指すところなれど、それにも増してこの国を獲るは彼奴の悲願よ。恐ろしき事じゃがな」

楓は、自分達が相手にしようとしてる存在の大きさに身震いした。「しかし、間に合うか？　もし源斎が陰陽師達を囃としてここに差し向けたとするならば、奴はもはや出雲に辿り着く頃かも知れぬ」

欽斎が時間的な不利を説く。しかし楓は、

「間に合います。間に合ってみせます」

と力を込めて言った。彼女には秘策があったのだ。

「私もご同道させて下さい、楓様」

耀斎が入って来た。彼はふらつきながら正座した。

「耀斎、動いて大丈夫なのか？」

蓮斎が近づいて尋ねた。耀斎は力なく笑い、

「大丈夫にございます、蓮斎様。私とて、小野の者。この程度で……」

しかし彼は夜を徹して京の町まで来た。その上、蜻蛉の掌底を食

らっている。応えていないはずがない。

「お断わり致します」

楓は非情に徹する事にしていた。

「楓様……」

憧れの楓に斬って捨てられるように同行を拒まれた耀斎は、目も虚ろになってしまった。

「貴方はお怪我をされています。ここにお残り下さい」

楓は強い調子で耀斎に言った。それでも耀斎は、

「しかし、出雲は私の生まれ育ったところ。私の命に代えても守るべきところです」

「楓殿の言う通りよ、耀斎。お前は残れ。楓殿の足手まといになる」

欽斎が間に入った。耀斎は「足手まとい」という言葉で、蜻蛉に軽く去いなされた自分を思い出していた。

「わかりました」

彼はようやく諦めた。楓はホッとして、

「ご養生下さい、耀斎様」

「……」

耀斎は悲しそうな目で楓を見て、弱々しく頷いた。

欽斎の心配が現実のものになろうとしていた。源斎はすでに出雲まで数里のところまで来ていたのだ。

「あの方にご伝授頂きし術、まだうまく使いこなせぬが、まさしく驚愕すべき技よ」

源斎はフツツと笑った。建内宿禰が源斎に教えたのは、「根ねの堅か州たすくに国」を使つての移動だった。根の堅州国とは、所謂「死の国」である。その国を通る事によって、遠くまで一瞬にして行く事ができるのだ。源斎はまだその秘術を完全に修得しておらず、本来であれば一度で辿り着ける出雲にまだ到着できていなかった。しかも、その秘術は慣れないうちは酷く疲労する術であった。

「これを修得すれば、日の本を統すべるも容易たやすき事となる」

源齋は前方に見える出雲に連なる山々を見据えた。

「鬼を我が手に」

彼の言う鬼とは何であろうか？

楓はいよいよ宗家を出発する事になった。

「本当に一人で大丈夫なのか、楓殿？」

蓮齋が念を押すように尋ねた。楓は微笑んで、

「一人で行かなければ追いつけませぬ」

「む？ それはどういう事じゃな？」

蓮齋達には楓の言葉が謎めいて聞こえた。

「秘術にて参りますので」

「秘術とな？」

欽齋も眉をひそめた。楓は一同を見て、

「はい。では、行って参ります」

と言うと、柏手を四回打った。

たかまがはら

かんづま

あま

とりふねのかみ

「高天原に神留ります、天の鳥船神に申したまわく！」

のりと

楓はその祝詞と共に光り輝き、上空へと舞い上がった。

「おお！」

蓮齋達はその美しさに驚愕した。楓は眩い光に包まれ、飛び去った。

「あれこそが宗家の者のみに伝わる秘術、天の鳥船神……。本来ならば、あの子こそが宗家を継ぐべきなのじゃ」

蓮齋はそう呟いた。

六の章 対決 その一

楓が初めて天の鳥船神あまとりふねのかみの術を使ったのはわずか三歳の時である。兄徹斎が修行しているのをそばで見えて、まさしく見よう見真似で会得したのだ。

「この子は生まれながらにして術者だ」

父栄斎は、実は楓を後継者にしようとは本気で考えていた。しかし、一門の集まりで猛烈な反対に遭い、断念したのだ。徹斎達ですら、嫉妬ではなく寧ろ畏敬の念を持って楓に接していた。それ程楓の才能は抜きん出ていた。

それに加えて、全てにおいて控え目な彼女は、一門衆の中でも人望が厚く、成長するにつれてその美しさも増し、「まさに姫巫女」と言われた程なのだ。源斎がほとんど楓に関する知識を持ち合わせていないのは、父である斎明が一門の中で相手にされておらず、ほとんど接触の機会がなかったためである。その事も、今回の騒動の一因となっていた。

「兄様……」

楓は飛翔しながら、兄達の無念を思い、涙した。

「生まれてこの方、人を怨んだ事などないけれど、源斎だけは許せない」

彼女はそう呟き、出雲を目指した。

源斎は再び根ねの堅州国かたすくにを通り、更に出雲に近づいていた。

「出雲に眠るは最強の鬼。その鬼を解き放てば、俺は日の本を手に入れられる」

源斎はその野望に満ちた目をギラつかせ、ニヤリとした。その時彼は、不意に楓を感じた。

「何!？」

源斎はギョツとして振り向いた。楓の近づき方が尋常な速さでは

ないからだ。

「何事だ？ 人の速さにあらず。あの女、何をした？」

源斎は楓の「異変」に気づきはしたが、まさか飛翔しているとは夢にも思っていなかった。蜥蜴とかけの、

「楓は空を飛びます」

という話も、精々高い木に飛び上がる程度と解釈していたのだ。勿論源斎は楓を過小評価している訳ではない。徹斎達より上と考えている。それでも、飛翔にまで考えが及ぶ事はなかった。

「姫巫女流には、早駆けの秘術があるのか？」

源斎は自分の家の地位の低さに死んだ父斎明を恨んだ。

「父上が賢明ならば、俺はもっと上に行けたのだ」

しかしそれは逆恨みである。

一方、出雲の晋斎も、源斎が近づいている事を感じていた。

「黄泉の気がこちらに向かっているか。私で齒が立つのか？」

晋斎は黄泉路古神道に底知れぬ恐怖を覚えた。

「む？」

空気が振動している。晋斎は驚いて神社の拝殿に行った。

「何事だ？ 大社が震えているのか？」

きづきのおおやしろ

杵築大社と呼ばれる出雲大社の下には鬼が封じられている。

晋斎は幼い頃から、何故第一分家が出雲にあるのか、父から聞かされていた。

「ここは日の本の要のかなめの一つ。命に代えても守らねばならぬ」

その父の言葉は、身に染みついている。そして嫡男耀斎にも伝えた。

「源斎が近づいている事が関わっているのか？」

晋斎は不安になった。

「もし、封印が破れし時は、この命に代えて鬼を止めねば」

もはや耀斎とは会う事は叶わないと晋斎は思った。

楓はすでに伯耆の国（現在の鳥取県）上空に来ていた。

「出雲まであと少し……」

源齋の動きが気になる。彼女は源齋の元の身体に残っていた建内たけしう宿禰ちのすくねの妖気を頼りに彼を探していた。

「まだ大社には着いていないはず。何としても、その前に止めなければ」

楓はより飛翔の速度を増し、出雲へと向かった。

源齋も楓の急接近を感じ、道を急いでいた。

「根の堅州国の術をうまく使いこなせておれば、これ程氣に病む必要もなかったものを」

自分の未熟さを嘆く暇もない。出雲に着く前に楓に追いつかれてしまえば、彼の計略は終わってしまうかも知れないのだ。それだけ源齋は楓の未知なる力を恐れていた。

「俺は負けぬ。このまま終わりたいくはない」

源齋の野望は果てがなかった。楓の脅威は拭い切れないが、それでも自分の力の方が優っていると考えてもいた。

「黄泉路古神道は姫巫女流の邪流にあらず。全く別の流派。姫巫女流を超えた存在なのだ」

彼は自分に言い聞かせるように呟いた。

他方宗家では、蓮齋達が最悪の事態に備え、話し合いを続けた。

「よもや楓殿が敗れる事もないであろうが、もしもの場合どうするべきか、皆の考えを聞きたい」

蓮齋は他の者達を見渡しながら言った。

「これだけの面々がおるのですから、心配いらんでしょ」

琳齋は相変わらず他人事のように言った。欽齋が、

「しかし、源齋の手下が陰陽師と忍だけとは限らんど。まだ他におるやも知れぬ」

「そうだ。それに建内宿禰も源斎だけを手駒としているとは限らぬ。備えあれば憂いなしじゃ」

蓮斎も同意した。琳斎は忌ま忌ましそうな顔をして、
「ならばそうすれば良いでしょう。私は、もし楓殿が敗れし時は、宗家は終わ리と思うておりますが」

と嫌味な事を言った。欽斎がムツとして、

「お前は何故そう歪んだ物の考え方をするのだ、琳斎。今は小野一門の一大事なるぞ」

「小野宗家の一大事でございましょう？ 我が奈良分家は、無関係にございます」

「琳斎！」

蓮斎が堪りかねて怒鳴った。琳斎はギクツとして蓮斎を見た。

「小野家の一つ。宗家だけの事ですまぬから、こうして集まっておるのじゃぞ。栄斎殿は源斎に身を奪われたとの事。今は宗家は楓殿のみ。楓殿を助ける事こそ、我らの務めぞ」

「……」

琳斎は反論こそしなかったが、全く納得した様子がなかった。

源斎はとうとう出雲の国に入った。周囲は田畑ばかりで長閑な場所だ。

「おお」

彼は鬼の力を感じていた。

「これが大社の下に眠りし鬼の力か」

彼は満足そうに笑った。

「勝てる。この力を手に入れし時、俺は楓を超える」
その時だった。

「何？」

彼は背後から迫る光に気づいた。

「楓？ まさか……」

源斎は空高く近づいて来る光を見て啞然とした。

「そんな……」

まだ信じられない。しかし、その光に包まれている楓には、幼い時にほんの一瞬見かけた女の子の面影が間違いなくあった。

「源齋！」

楓も源齋に気づき、地面に降り立った。源齋はようやく我に返り、

「それが姫巫女流の秘術か。やはり侮り難し」

「源齋、大社には行かせぬ。宗家の名に賭けて！」

楓は全身から気を放出して言った。源齋はニヤリとした。

「その程度か。宗家の者と思い、案じていたが、取越苦労であった」

「何？」

楓は源齋の身体から放出される妖気に身を引いた。

「これは……」

源齋は楓の顔を見て、

「怯えておるのか、楓？ 俺の力はまだこの程度ではないぞ」

と言い、右手に漆黒の黄泉剣ヨミツルギを出した。

「くっ……」

楓は一步退き、

「十拳の剣！」

と右手に光り輝く剣を出した。源齋は嘲笑し、

「その剣は、お前の益体もない兄徹齋が振るいし剣。俺の黄泉剣には勝てぬ」

兄を愚弄された事に怒った楓は、一足飛びに源齋の懷に踏み込んだ。

「何と！」

源齋は意表を突かれた。

「タアッ！」

源齋は楓の上段からの斬撃を黄泉剣で辛うじて食い止めた。

「うぬ！」

それを振り払い、攻撃に転じる。左からの袈裟斬り。しかし、楓はそこにはおらず、剣は宙を切っただけだった。

「おのれ、小娘！」

源齋が思わずそう言っていると、楓は負けずに、

「巫山戯た事を！ 私は十七。お前は十五であろう！ 小娘呼ばわりされる謂れはない！」

と言いつ返した。

「黙れ！」

源齋は怒りのあまり、剣を捨て、両手の指全てから黄泉醜女よみうしじょ（顔半分が腐った黄泉の化け物）を放った。

「何、これは？」

楓は初めて見る黄泉醜女に驚いたが、

「姫巫女流に敵なし！」

と叫ぶと、十体の黄泉醜女を次々に斬り捨てた。醜女は十拳の剣で斬られると、霧のように消えてしまった。

「……」

源齋は楓の対応力に完全に気圧されていた。

（何故だ？ 何故こやつはこれ程に強いのだ？）

『源齋、何をしている？ 早う鬼を解き放て』

頭の中で建内宿禰が言った。

『しかし建内宿禰様、こやつこやつの力、侮れませぬ』

『ならば我が力を貸そう』

建内宿禰のその声と同時に、源齋の周囲にどす黒い妖気が漂い始めた。

「何？」

楓はそれを見て眉をひそめた。

七の章 対決 その二

楓は源斎を睨みつけた。

「人でなくなるつもりか、源斎？」

源斎はその言葉に笑った。

「人でなくなる？ そうだ。この俺は人を超え、神に近づく。日の本を統べる神にな」

「……」

楓は啞然とした。

（この男、魅入られている。建内宿禰の妖氣に……）

建内宿禰は本当に源斎を日本を統べる者にするつもりなのか？

冷静に考えれば、それはあり得ない。その昔、建内宿禰は日本を自分の物にしようとし、姫巫女流から邪流である黄泉路古神道を創始したのだ。そんな野心の塊の建内宿禰が他の者に日本を渡すはずがない。源斎は捨て駒にされる。楓はそう思っていた。

「無駄な時を費やすつもりはない。お前は早々に片づける。あの方のお力をお借りしてな」

源斎の妖氣が更に黒さを増した。

「愚かな……」

楓はそう言いながらも、何とか源斎を救う事ができないかと考えていた。

（この男も哀しい存在。何とか救えないだろうか？）

「お前は何を考えている？ この俺に勝てると思うているのか？」

源斎の言葉が楓を現実に戻した。

「お前こそ、姫巫女流に勝てると思っているのか？」

楓は語気を強めて言い返した。しかし源斎は怯まない。

「先程はお前の氣に押されたが、今は違う。俺の方がお前の上にいます。負けはせぬ。否、必ず勝つ」

「どうしても、出雲の鬼を目覚めさせるつもりなのか？」

楓は十拳の剣を中段に構え、尋ねた。源斎はせせら笑って、

「元よりそのつもりだ。お前を殺してから、ゆっくりと鬼の封印を解く」

「そのような事、断じてさせぬ」

楓の気が一気に膨らんだ。源斎はそれを感じてフツと笑い、

「虚仮威こけおどしか。俺には通じぬ」

源斎も妖気の量を爆発的に増やした。

「黄泉醜女よもつしめ合わせ身！」

源斎の指先から放たれた黄泉醜女が融合し巨大化した。その巨大な黄泉醜女が楓に向かう。

「神剣、草薙剣くさなぎのつるぎ！」

楓は十拳の剣を出したまま、左手にもう一つの神剣を出した。

「何と！」

源斎はギョツとした。あの栄斎も剣は一つしか持たなかった。ところが楓は両手に神剣を持っている。

「こやつ、やはり……」

蜥蜴とかげが警戒していた理由がわかった。楓は栄斎よりも、徹斎よりも上なのだ。

「はアーツ！」

楓は二つの剣で巨大化した黄泉醜女を斬り裂いた。

「このような者をいくら繰り出しても同じ。源斎、諦めよ」

楓はもう一度源斎を睨んだ。すると源斎は楓を惑わす手法を用いて来た。

「か、楓……。父じゃ……。助けてくれ、楓……」

楓は思わず足を止めた。姿はそうでも中身はもはや違う。そう自分に言い聞かせていたが、父の声で、父の姿でそう言われると、彼女の感情は雪崩を打ったように混乱に陥って行った。

「父上……」

楓の目に涙が浮かんた。源斎が乗っ取った父の姿がぼやけて見え

る。

「甘いわ、小娘！」

源齋は狡猾な笑みと共に楓に襲い掛かった。彼は再び黄泉剣を出し、楓を斬りつけた。

「く！」

楓は辛うじてそれをかわした。しかし、剣先から出る妖気で痛手を受けてしまった。

「卑怯な！」

楓は涙を堪えて源齋に怒鳴った。源齋はニヤリとして、

「それは俺にとっては褒め言葉よ。情に流されるなど、やはりお前は小娘。小野一門はその程度の存在という事の表れ」

「……」

確かに源齋の指摘通りであった。父栄齋ならば、迷う事なく斬り捨てている。例えば自分が自分の血肉を分けた者だとしても。一門の長とはそういうもの。父はよくそう語っていた。

「やはり滅すべきは小野宗家、小野一門。栄えるべきは我らが黄泉路古神道よ」

源齋は嬉しそうに言っただけ。

「滅びよ、小野の者共！」

源齋は剣を振り上げ、楓に突進した。楓は素早く飛翔し、源齋の剣撃をかわした。

「うぬ！」

源齋は悔しそうに楓を見上げた。楓は情を捨てる事にした。

（父ではない。あそこにいるのは、父の姿をした魔物）

彼女はこみ上げて来る悲しみを打ち消し、

「お前は姫巫女流を何もわかっていない」

「何!？」

源齋は楓の言葉に眉をひそめ、声を荒げた。

「姫巫女流秘奥義、姫巫女合わせ身！」

楓は剣を腰に差し、柏手を四回打った。彼女の身体が光り輝く。

「な、何事だ？」

源斎はその輝きの凄まじさに目を細めた。

『源斎、来るぞ。備えよ。よもやあの娘がこの奥義を修得していようとは思わなんだ』

建内宿禰の声がした。源斎は、

「秘奥義？ 合わせ身だと？」

黄泉路古神道にも「黄泉醜女合わせ身」という技がある。しかしそれとは異質なもののようだ。源斎は楓の奥義に理由もわからず怯えていた。

「建内宿禰様が備えよと仰せになるとは、いかほどのものなのか……」

源斎が楓を見上げてみると、天から光が射し、楓を照らした。そして雲間から一人の荘厳な光を背負った巫女姿の女性が現れた。

「む？」

源斎は更に目を細めた。建内宿禰の声が、

『やはり倭の女王か』

と言った。

「何と！」

源斎は噂にだけ聞いた事があった。姫巫女流の秘奥義。祭神である天照大神を呼び出し、自分に降ろす術。それを今日の前で楓がなさそうとしているのだ。

『源斎、うぬには勝てぬ。退くのだ』

源斎は建内宿禰の言葉に耳を疑った。

（勝てぬ？ 退け？ 馬鹿な……。この俺の中には退くという言葉はない！）

先程まで怯えていた自分を忘れてしまったかのように、源斎は激高し、楓を睨んだ。

楓に巫女姿の女性が憑依し、輝きが増した。

「源斎、お前を滅する！」

楓は剣を構え直し、光と共に源斎に向かって降下した。

「俺は負けぬ！」

源齋は身体中の妖気を放出し、剣を構えて楓を迎え撃った。

「源齋！」

二つの剣が源齋の黄泉剣を打ち砕いた。

「ぐおお！」

源齋はその衝撃で後ろに跳ね飛ばされ、倒れた。

『やめよ、源齋。ここは退くのじゃ』

建内宿禰の声がまた聞こえた。しかし源齋は、

「俺は負けぬ！」

と立ち上がり、もう一度黄泉剣を出した。そして、

「黄泉醜女合わせ身、二重^{ふたえ}！」

と叫ぶと、合体した黄泉醜女を更に合体させ、それを剣に憑依させた。

「俺は勝つ！」

源齋の底知れぬ執念に、楓は立ち止まってしまった。

「この男をここまで駆り立てる物は何？」

楓には源齋の考えが理解できなかった。

「死ね、小娘！ 滅びよ、宗家！ 滅せ、小野一門！」

源齋のその呪いのような言葉に、楓は彼の心の奥底を覗いた気がした。

（この男は、自分の生まれを呪っている。全てが、そこに行き着く……）

しかし同情はしない。楓は源齋を見据えた。

「はアッ！」

源齋の剣撃を二つの剣で受ける。

「ぬうう！」

源齋は後ろに飛び、再び突進した。

「姫巫女流は滅びない！」

楓は敢えてそう言った。「小野家は滅びない」と言えば、源齋の「呪い」を肯定した事になると思ったからだ。小野家は滅びる事は

あるかも知れない。だが、姫巫女流の理は滅びない。そう考えたのだ。

「姫巫女流古神道奥義、神剣乱舞！」

「くぬううう！」

源斎は楓からの光の剣撃を受け、後退した。黄泉醜女は光で消失し、剣は粉々に砕けた。

「うおおおお！」

彼は恐怖を感じた。ようやくわかったのだ。

（まさか、まさか、まさか！）

考えたくなかった。しかし、もう認めるしかない。

「俺は、負けるのか？」

源斎は楓を見た。楓は剣を中段と下段に構えていた。

「源斎、覚悟！」

楓が剣を交差させて走って来る。

「おのれえええ！」

源斎は悔しさを堪えきれずに叫び、根の堅州国に逃げた。

「くっ！」

楓の剣は虚しく空を斬った。

「逃げられた……」

抑えていた感情が爆発し、楓は泣いた。

「父上ーッ！」

その叫びは、周囲に響き渡った。

終の章　そして未来へ

楓は気がすむまで涙を流して栄斎と兄達の死を悲しみ、声を枯らした。そして気を取り直し、出雲の小野神社を目指して飛翔した。

楓が空から現れた事に、晋斎は仰天したが、すぐに笑顔になり、彼女を労^{ねぎら}った。

「愚息がご迷惑をおかけしなかったかな？」

晋斎はそれとなく耀斎の事を尋ねた。心配なのである。

「そのような事はありません、晋斎様。耀斎様は、私を助けて下さいました」

「そうか。それは良かった」

晋斎は耀斎の実力をよく知っている。だから楓が気を遣って話している事も承知しているのだ。それでも、宗家の人間に「助けてもらった」と言われるのは、父親として嬉しかった。

「無事であればそれだけで何より。して、源斎の奴めは？」

晋斎は神妙な顔になって尋ねた。楓は暗い顔になり、

「逃^{のが}してしまいました。根^ねの堅^{かた}州^{すく}国^{くに}に」

「そうか。それでは致し方なし。あの国には、姫巫女流の者は行けぬからな」

「はい」

晋斎の慰めも苦痛だった。楓は、一瞬の隙を源斎に与えてしまった自分の未熟さを悔やんでいるのだ。後もう少し、踏み込みが速ければと思うと身体が震えるくらい悔しいのだ。

「楓殿」

晋斎が声をかける。楓ははっと我に返って晋斎を見た。

「全て自らの責めと思う事はない。源斎の事は、我らの不始末。黄泉路に落ちたるを見抜けなんだは、まさに言い訳のしようもない程の落ち度」

「……」

楓は晋斎が自分を氣遣って言ってくれているのかと思ったが、晋斎の目は怒りに溢れていた。同時に己おのれの不甲斐なさを恥じてもいたのだ。

「源斎の妖気は感じられぬ。しばらくは戻るまい。楓殿も休まれよ」
晋斎は晴れやかな顔で言った。楓もニッコリして、

「はい」
と応じた。

第一分家の屋敷に向かう途中、晋斎が口を開いた。

「正直なところ、耀斎はどうか、楓殿？」

「はい、ご立派になられておいでで、驚きました」

楓は耀斎の実力について尋ねられたと思い、そう答えた。すると晋斎は苦笑いをして、

「いや、耀斎を男としてどう見ておられるかとお尋ねしたのだが」
「え、男として、でございますか？」

楓は耀斎を成年男子として見ていなかった。第一分家の跡取りで、宗家に事あらば代わって宗家となる家の後継者として考えた事が無い。

「眼中にあらず、かな？」

晋斎の言葉に楓は慌てた。

「いえ、滅相もございません。私は宗家の娘ですが、跡目ではありませぬ。耀斎様とは釣り合いません」

「それを聞いたら、彼奴あやつは嘆くであろうな」

「は？」

楓は色恋には誠に疎い。同じ年頃の男共は、子供の頃は皆お転婆な楓の手下のような存在であったし、年上と言えば兄達か父栄斎、末吉くらいしかおらず、耀斎を男と見るという発想がそもそもなかった。幼い頃から耀斎を知っているため、そういう感覚を持った事がない。

「耀斎は楓殿めおとと夫婦になるのが夢なのでな」

「め、夫婦ですか？」

楓は赤面した。そんな事を言われると、意識してしまう。

「お嫌かな？」

晋斎はニヤリとして言った。楓は火照る顔を両手で冷やすように触りながら、

「そのような事、考えた事がございません故、何とお返事すればよろしいのか……」

「そうだな。耀斎とは幼き頃より顔見知り故、楓殿には答えようがないな」

晋斎は少しだけ期待していたのだが、楓の動揺ぶりから、もうこの話はしない方が良いと判断した。

「申し訳ございません、晋斎様」

楓は深々と頭を下げて詫びた。晋斎は逆に驚いて、

「いやいや、私が悪かった、楓殿。耀斎とは、今まで通り、よしなに」

「は、はい」

楓はそれでも慌てていた。耀斎は自分をそのように見ている。思ってもいない事である。

（私など、只お転婆なだけの粗忽者で……）

自分のような者が間違っても跡継ぎでなくて良かったと思ってる程、楓は控え目なのだ。

源斎は打ちのめされていた。

（俺は怯えていた。あの女に震えてしまった。今のままでは勝てぬのか）

彼は根の堅州国を漂っていた。

『源斎、今は待て。我らには死はないのじゃ。あの娘もやがて衰え、死ぬ。それからでも遅うはない』

たけしうちのすくね
建内宿禰の声がした。

「はい」

源斎もそう考える事にした。そう考えるしか、楓に対する恐怖を

拭い去る方法がなかったのだ。

「それにしても、宗家が憎い。この俺にこれ程までの辱めを……」

源齋はギリギリと齒軋りをした。

『憎しみは力となる。もつと宗家を、小野の者達を憎め、源齋。さすれば、うぬは彼奴らあやつを超えよう』

「はい」

源齋はもはや建内宿禰の言うがままであった。

楓は晋齋に別れを告げ、再び飛翔して京の都を目指していた。

「源齋……」

彼女には何故か源齋を憎む事ができない。

（源齋も小野家に生まれなければ、あのような事にはならなかった。あそこまで自分の生まれを呪ったりする事もなかった）

まさに宿命である。時代は大きく変わろうとしている最中さなかであるが、日本人が「家」に縛られる悲劇はこの先しばらく続く事になる。

小野一門は、宗家の跡目を定めるために話し合いをした。そんな折、明治維新が起こり、天皇家は京都から新都である東京に移った。それに合わせて小野家も宗家を東京に移す事となり、徹齋の長男である亮齋が宗家後継となり、次男享齋は新たに定められた「京都小野家」の開祖となった。それが新たな火種になる事はまた別の話である。

楓は亮齋と享齋の教育に力を注いだ。

やがて楓は第一分家に嫁ぎ、耀齋との間に跡継ぎを儲ける。耀齋の宿願は成就したのだ。

時代は下り、昭和。耀齋と楓の孫に当たる牡丹ばたんが宗家に嫁ぎ、嫡男仁齋が宗家の後継者である劉齋りゅうさいとの間に誕生する。

時代は更に進み、平成。仁齋の孫である藍が遂に姫巫女流の最終

奥義である姫巫女二人合わせ身を会得し、宿敵源斎を打ち負かした。

これにて異聞譚はお開きとなる。楓は今でも宗家を見守っている。
見守る事ができない兄達と栄斎の代わりに。

—完—

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2967i/>

ヒメミコ伝異聞譚 神在月の巫女

2011年10月27日14時02分発行